

## コラム

# 古より信仰を育んだ海を体感する試み

## －世界遺産「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群におけるLiving History促進事業の活用－

入佐 友一郎（福岡県教育庁教育総務部文化財保護課）  
豊崎 修平（福岡県人づくり・県民生活部世界遺産室）

### はじめに

史跡整備においては、史跡が持つ魅力や価値を、来訪者に対して、最も効果的に伝える方法を検討し、実行することが重要となる。魅力や価値を伝える上で、整備担当者が苦慮することの一つは、史跡が持つ歴史的背景や遺構の特徴を伝達することに加え、遺跡とともにあった当時の人々の姿や気持ちをどのように表現するか、という事項である。

令和元年度から文化庁がLiving History促進事業を始め、福岡県内でも令和2年度から2件の新規事業が採択されており、この点を解消する一つ的手段として注目している。

本コラムでは、これらの中から、福岡県世界遺産室が事業を進めている「世界遺産「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群」における事例を紹介する（図1）。この事業では、禁忌により原則入島できない史跡（世界遺産）におけるLiving History促進事業のあり方、さらには、コロナウイルスのパンデミック禍に適応させた実例も包含されており、参考となれば幸甚である。

### 「神宿る島」

#### 宗像・沖ノ島と関連遺産群とは

1500年以上の長きにわたり、福岡県宗像地域の人々により守り継がれてきた「『神宿る島』宗像・沖ノ島と関連遺産群」は、平成29年（2017）7月、第41回ユネスコ世界遺産委員会において、国内21件目の世界遺産として登録された。今日まで継承され

てきた貴重な本遺産群は、①沖ノ島（宗像大社沖津宮、図2）、沖ノ島に付随する岩礁である②小屋島・③御門柱・④天狗岩、大島に所在する⑤宗像大社沖津宮遙拝所、⑥宗像大社中津宮、九州本土に所在する⑦宗像大社辺津宮、⑧新原・奴山古墳群という8つの資産（①～⑦：宗像市、⑧：福津市）で構成される。

九州北西岸の宗像市から約60km、玄界灘に浮かぶ



図1 本遺産群の構成資産



図2 沖ノ島

沖ノ島は、島全体が宗像大社沖津宮の境内で、4世紀から9世紀にかけて航海の安全を願う自然崇拝に基づいた国家的な祭祀が行われた。古代祭祀遺跡はほぼ手つかずの状態です。現代まで守り伝えられ、調査で見つかった約8万点の奉獻品は全て国宝に指定されている。古代祭祀は中津宮と辺津宮でも行われ、沖ノ島への信仰を起源とする宗像大社の三宮は、宗像三女神をまつる信仰の場として現在まで続いている。また、禁忌や遙拝などの沖ノ島に対する信仰の伝統は、宗像地域の人々の間で現在まで受け継がれ、大島に沖津宮遙拝所が設けられた。新原・奴山古墳群は、日本と大陸との海を越えた交流と祭祀を担い、信仰の伝統を築いた古代豪族宗像氏の墳墓群である。

前述した沖ノ島にまつわる禁忌は、入島を厳しく制限してきたことをはじめとして、「おいわずさま不言様」（島で見聞きしたことを口外してはならない）、「一木一草一石たりとも持ち出してはならない」（沖ノ島からは一切何も持ち出してはならない）などが知られ、これらの厳格な禁忌によって古代祭祀の変遷を示す遺跡が現在まで守られてきたのである。

## 沖ノ島遠望船へのニーズ

禁忌により一般人が沖ノ島に上陸することは禁じられていることから、本遺産群の世界遺産としての価値を正しく理解してもらうには、九州本土や大島にある構成資産や展示・解説施設に来訪してもらうことが必要となる。そのため、沖ノ島が信仰と遺跡の保護の観点から立ち入りが禁止されていることを周知するとともに、ウェブサイトのほか、辺津宮に隣接する世界遺産ガイダンス施設「海の道むなかた館」を中心として、遺産群の価値の訴求に努めてきた。

このような中、本遺産群の保存管理・公開活用を担う「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群保存活用協議会（福岡県・宗像市・福津市・宗像大社で構成）では、令和元年7月、試験的に、神域とされる沖ノ島より2km（史跡指定範囲）まで船で近づき、



図3 沖ノ島遠望船ツアー（令和元年度）狗岩

島を遠望する「沖ノ島遠望船」での見学を実施した（図3）。本イベントには定員の5倍を超える申し込みがあり、高い市場ニーズがあることを実感する結果となった。また、令和2年9月には、コロナパンデミックの影響で海外への旅客運航ができないJR九州の高速船ビートル（ジェットfoil）を用いた沖ノ島遠望船ツアーを旅行代理店が催行し、こちらも好評を得たところである。さらに、沖ノ島遠望船に関する問い合わせは、大手旅行代理店等から保存活用協議会に対して継続的にあり、本遺産群の公開活用の一手段として大きな可能性を感じているところである。

## 事業化に向けた課題

沖ノ島遠望船を「地域の業」として生み、育てていくにはいくつかの課題がある。

沖ノ島遠望船を運航する候補としては、海上タクシー、遊漁船、瀬渡し船などが挙げられる。しかし、それぞれの船の設備、金額、出航地、所要時間等に加え、申し込み先となる船の所有者も異なるため、来訪者が気軽に体験できる環境は整っていない。そして何より、信仰の伝統や歴史を理解した上で、古より信仰を育んだ海を体感し、参加者に本遺産群の価値やそれを支えてきた地域の歴史などを訴求できるようなプログラムを造成する必要がある。

## Living History促進事業の活用

沖津宮遙拝所および中津宮が所在する大島は、漁業を中心とする人口700人ほどの島である。沖ノ島の周囲で漁を行いながら、沖ノ島とともに暮らしてきたのが大島の人々であり、三宮の信仰をつないできた「神守る島」でもある。本来、沖ノ島を訪れる前には中津宮が所在する大島を訪れることが必要であることから、大島の人々は信仰の対象である沖ノ島を守り伝えてきた人々であると言える。また、大島には中世から宗像大宮司家に属する社家が住み、江戸時代にも福岡藩主の保護の下、彼らによって信仰が代々受け継がれてきた。

そのため、沖ノ島遠望船を持続可能な事業として造成するためには、沖ノ島の価値と文化的伝統を守ってきた地域への配慮が必須である。

保存活用協議会では、Living History促進事業を活用し、まず令和2年度はこの大島で事業化に向けた取り組みを開始した。歴史的な検証について助言する学術的な専門家の支援や観光に関する専門家からの支援を受け、大島の観光協会、漁業組合、旅館組合などと協働しながら沖ノ島遠望船プログラム造成に取り組んでいるところである。今年度は、遊漁船を活用した沖ノ島遠望船を目玉としたモニターツアーを実施することとしており、様々な歴史観光ソフトを検討し、今後の地域づくりに還元していく。そして、受け皿となる地域住民の機運の醸成を図るとともに、受入環境整備のためのノウハウを蓄積していく第一歩にしたいと考えている。

さらに今後は海上タクシーや瀬渡し船といった異なる船種・所有者・漁港に範囲を広げ、沖ノ島遠望船という体験プログラムのハウツーを横展開しながらそれぞれで事業化を図っていくとともに、旅行代理店等へのPRにも取り組み、沖ノ島遠望船という地域に新たな業を定着させていきたい。そして、「神宿る島」の無形の価値を来訪者に体感をもって伝えていきたいと考えている。